



佐藤春夫詩集

第一書房刊行



佐藤春夫詩集

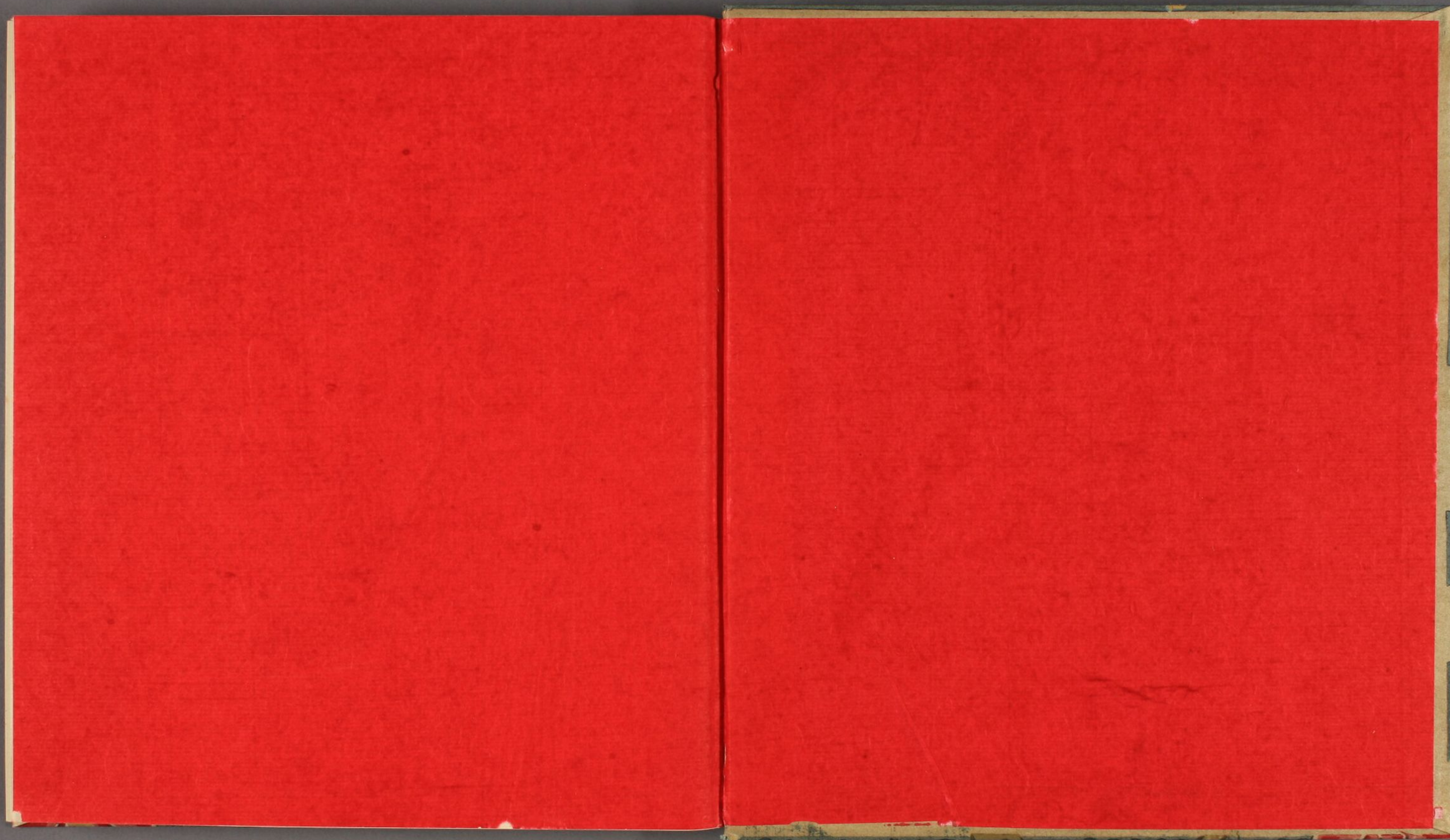
第一書房刊行





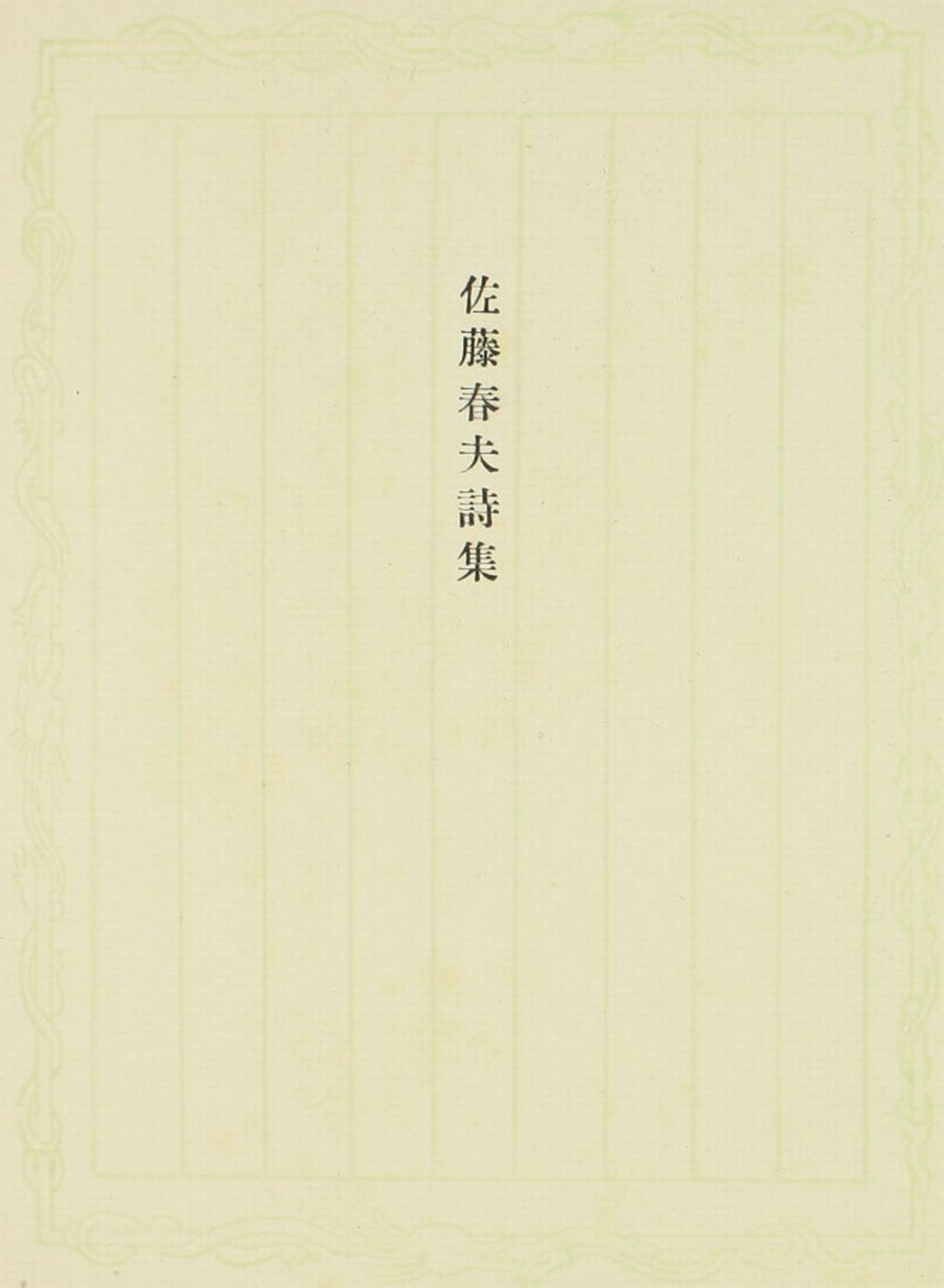






詩
集

佐藤春夫詩集



堀口大學に

詩集はしがき

數奇なるはわがうたの運命なるかな。かつては人に泣かれしものを、いまは世に喜ばるとぞ。しかも評家は指ざし晒ひて餘技なるのみといふ。或は然らむ。魯なるわれは餘技なるものために命をささげ來にけらし、志してより二十年のこの朝夕を。かくてわが青春のかたみにと一卷の歌ぐさぞ僅にわれにのこりたる。心すなほなる時には稚き言葉なほおぼ

つがなく、言葉やや長けにしとおもへば心はすでに弾みなし。いのち短きものいかでかひとり麗人のみならむや。もみぢの下葉なす今日のものをさへ加へて、數ふればわがうたの百にも足らはぬこといと口惜し。古人は螢雪を説きぬ、げにひときを惜むべきものただに春宵のみにはあらざりけらし。或はゆたかなる才のまにまに春蠶のよく絹を吐いて、千首詩こそ萬戸侯を輕んじもせむ。たとひ一吟に雙涙をながすとも百にも満たぬうたかたのわが歌をはたなにとかせむ。人のわれを指ざして晒ふもげにうべなりと知りぬ。いとせめて百年のの

佐藤春夫詩集

ちわがうた一つ世にあれよと願はば、さてもわが魯なること
の證をさらにひとつ増すのみに過ぎざらむか。しばし千々な
るおもひにふけりてさて筆を擱く。大正十五年三月ついたち
たまたま病める父をみとりせむとて歸れる故山の雨の夕べに

佐藤春夫しるす

幼き歌

北風よ起れ、南風よ来れ、わが園を
吹いてその香氣を揚げよ、願くはわ
が愛する者のおのが園にいりきたり
てその佳き果を食はんことを

雅歌第二章十六

夕づつを見て

きよく

かがやかに

たかく

ただひとりに

なんぢ

星のごとく。

犬吠岬旅情のうた

ここに來て

をみなにならひ

名も知らぬ草花をつむ。

みづからの影踏むわれは

仰がねば

燈臺の高さを知らず。

波のうねく

ふる里のそれには如かず。

ただ思ふ

荒磯あらいそに生ひて松のいろ

錆びて黒きを。

わがこころ

錆びて黒きを。

少年の日

I

野ゆき山ゆき海邊ゆき

眞ひるの丘べ花を藉き

つぶら瞳の君ゆるるに

うれひは青し空よりも。

2

影おほき林をたごり

夢ふかきみ瞳を戀ひ

なやましき眞晝の丘べ

さしぐまる、赤き花にも。

3

君が瞳はつぶらにて

君が心は知りがたし。

君をはなれて唯ひとり

月夜の海に石を投ぐ。

18

4

君は夜な夜な毛絲あむ

銀の編み棒にあむ絲は

かぐろなる絲あかき絲

そのラムフ敷き誰がものぞ。

19

秋の夜

がらす障子を

ゆすぶりて

夜ふく風を

にくむなり。

かひなき人ぞ

かた戀の

われを晒ふと

ふく風よ。

汝れが鋭き

あざけりは

君を落葉と

おもへとや。

ためいき

一

紀の國の五月なかばは

椎ひの木ののくらき下かげ

うす濁るながれのほとり

野うばらの花のひとむれ

人知れず白くさくなり、

佇みてものおもふ目に

小さななみだもろげの

素直すなはなる花をし見れば

戀人のためいきを聞くこころかな。

二

柳の芽はやはらかに吐息して

丈^{たけ}高くわかき梧桐はうれひたり

杉は暗くして消しがたき憂愁を秘め

椿の葉 日の光にはげしくすすり泣く……

24

三

ふといづこよりともなく

君が聲す。

百合の花の匂ひのごとく

君が聲す。

25

四

なげきつつ黄昏たそがれの山をのぼりき。

なげきつつ山に立ちにき。

なげきつつ山をくだりき。

26

五

蜜柑ばたけに來て見れば

か弱き枝の夏みかん

たのしげに

大おほいなる實をささへたり。

われもささへん

たへがたき重き愁を

わが戀の實を。

27

六

ふるさとの柑子の山をあゆめども
癒えぬなげきは誰がたまひけむ。

28

七

遠く離れてまた得難き人を思ふ日にありて
われは心からなるまことの愛を學び得たり
そは求むるところなき愛なり
そは信ふかき少女子の願ふことなき日も
聖母マリアの像の前に指を組む心なり。

29

死なむといふにあらねども

涙ながれてやみがた

ひとり出て佇みぬ

海の明けがた海の暮れがた

——ただ青くとほきあたりは

たとふればふるき思ひ出

波よする近きなごさば

けふの日のわれのこころぞ。

小唄

男のうたへる

ひとりものかや二十日月 海の夜あけにのこりたる

女のうたへる

かがみくもらす吾がといき 夕べは月の暈となる

嫁ぎゆく人に

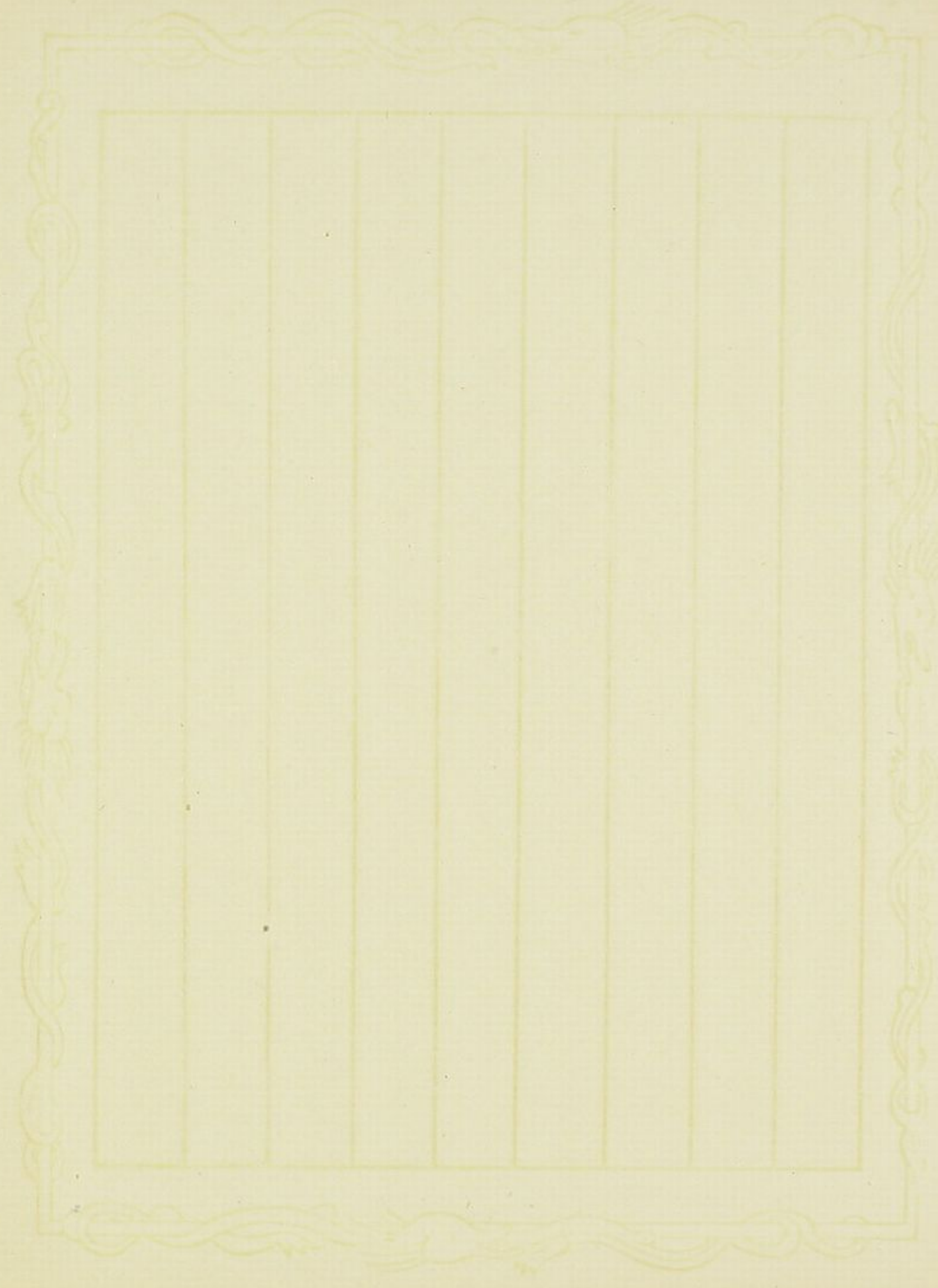
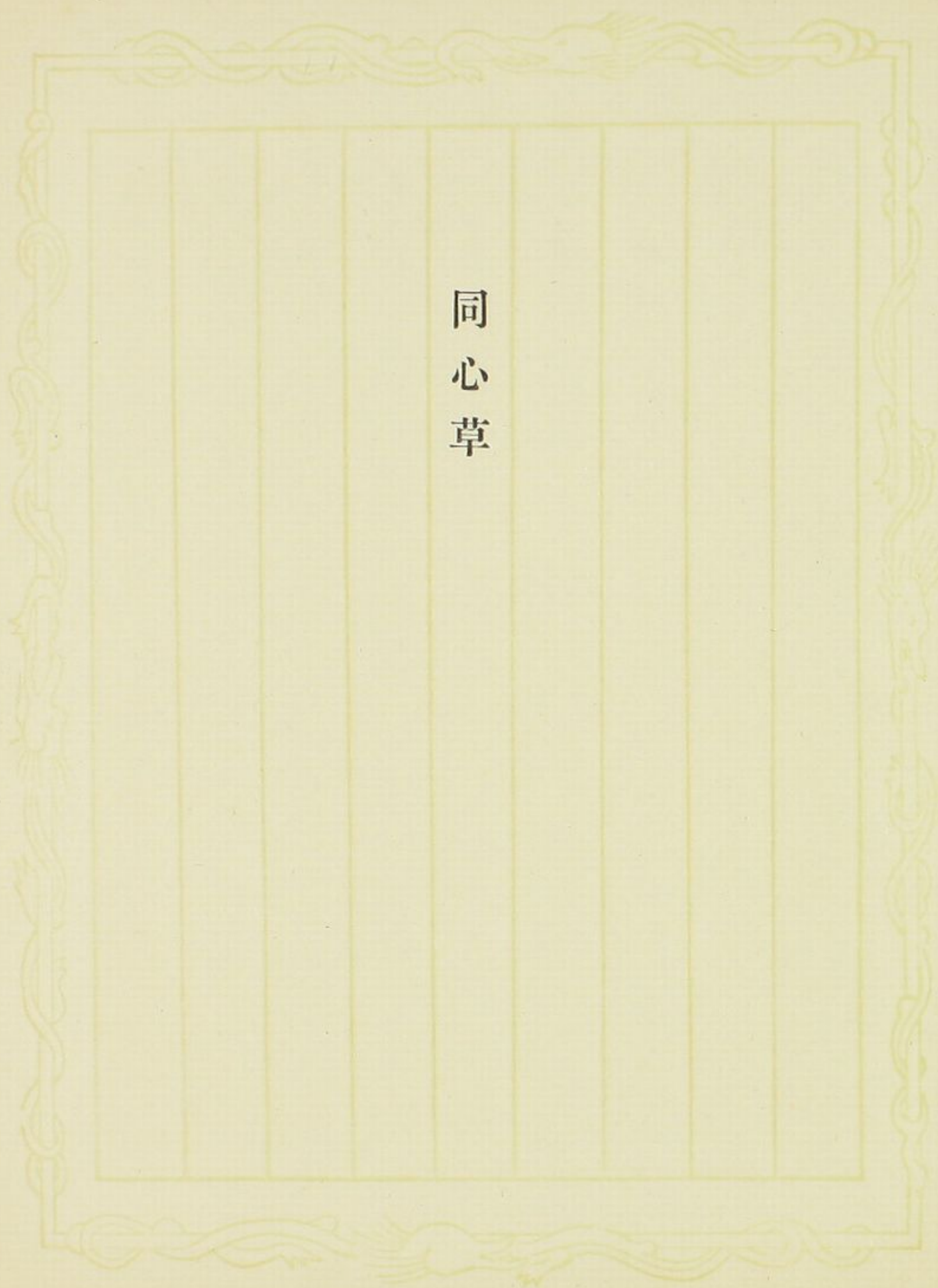
筒井筒をさなかりしころの友垣の

女の童ははやく年たけて嫁ぎゆく

こそ悲しくも甲斐なけれ

人妻の双のたもとほみぢかしや あはれ

同心草



風花日將老

佳期猶渺渺

不結同心人

空結同心草

薛濤

しづこころなくちるはなに

なけきぞながきわがたもと

なさけをつくすきみをなみ

つむやうれひのつくつくし

水邊月夜の歌

せつなき戀をするゆるに
月かげさむく身にぞ泌む。
もののあはれを知るゆるに
水のひかりぞなげかるる。
身をうたかたとおもふとも
うたかたならじわが思ひ。

げにいやしかるわれながら
うれひは清し 君ゆるに。

或とき人に與へて

片こひの身にしあらねど

わが得しはただこころ妻

こころ妻こころにいだき

いねがてのわが冬の夜ぞ。

うつつよりはかなしうつつ

ゆめよりもおそろしき夢。

こころ妻ひとにいだかせ

身も^{たま}靈もをのきふるひ

冬の夜のわがひとり寝ぞ。

また或とき人に與へて

しんじつふかき戀あらば、

わかれのこころな忘れそ、

おつるなみだはただ祕めよ、

ほのかなるこそ吐息なれ、

數ならぬ身といふなかれ、

ひるはひるゆる忘るとも、

ねざめの夜半に思へかし。

海べの戀

こぼれ松葉をかきあつめ
をとめのごとき君なりき、
こぼれ松葉に火をはなち
わらべのごときわれなりき。
わらべをとめよりそひぬ

ただたまゆらの火をかこみ、
うれしくふたり手をとりぬ
かひなきことをただ夢み、
入日のなかに立つけぶり
ありやなしやとただほのか、
海べのこひのはかなさは
こぼれ松葉の火なりけむ。

淡月梨花の歌

こはこれわが未だをとめなりし頃のうつし繪なり。さらば、
けに君にこそはおくらめ。をかしき姿をな笑ひそ。ゆめ、人
にな示しそ。心せよ、わが片身なるものを。かく言ひて、人
のひそかにわれに與へたるひとひらの紙の上には、手に團扇
もちて立てる舞姫姿の君ありき。ながめ入りつつ、さてわが
言ひ出でし言葉は癡にして歌に似たりき。

かなしく白くうつしく
わが心こそそぞろなれ。

あはでむなしく過ぎにける
汝がむかしこそ憾なれ。

夕月あはき梨花にして
汝が立てるこそ切なけれ。

ああかかる日に君をみて
かたりし人ぞ嫉ましき。

秋くさ

さまよひくれば秋くさの
一つのこりて咲きにけり、
おもかげ見えてなつかしく
手折ればくるし、花ちりぬ。

箏うた

吹く風に消息をだにつけばやおもへども

よしなき野べに落ちもこそすれ 梁原秘抄

かくまでふかき戀慕とは

わが身ながらに知らざりき、

日をふるままにいやさる

みれんを何にかよはせむ。

空ふくかぜにつけばやと

ふみ書きみれごかひなしや、

むかしのうたをさながらに

よしなき野べにおつるとぞ。

後の日に

つれなかりせばなかくに
そらにわすれて過ぎなまし、
そもいくそたびしほりけむ
たもとせつなしかのたもと。
せつなさわれにつのるとも

沾ひぢてはかわくものなれば
昨日けのたもとにこと問はむ
ぬるるやいかなほけふも。

よきひとよ

よきひとよ はかなからずや

うつくしきなれが乳ぶさも

いとあまきそのくちびるも

手を取りて泣けるちかひも

わがけふのかかるなげきも

うつり香の明日はきえつつ

めぐりあふ後さへ知らず

よきひとよ、地上のものは

切なくもはかなからずや。

こころ通はざる日に

こころを人にさらせごも

げにもとなげく人ぞなき、

こころのいたで血を噴けと

あなやと叫ぶ人ぞなき。

すまじきものは戀にして

苦しきものぞこころなる、

こころはいとし、すべもなし

手にはとられず目には見られず。

なみだ

埋火もきゆや泪の烹る音

芭蕉

あるはのきばゆたつけぶり、

あるは樋をゆくたにのみづ、

あるはわが目にわくなみだ。

これをさだめとさるゆるゑ、

ぜひなきものと知るらめご、

とめてとまらぬものなれば、

せつなやあはれほそぼそと、

ひとすぢにこそながるらし。

別離

入と別るる一瞬の

思ひつめたる風景は

松の梢のてつぺんに

海一寸えんに青みたり。

消なば消ぬべき一抹の

海の雲より洩るやらむ。

焦點とほきわが耳は

人の嗚咽を空に聞く。

感傷肖像

摘めといふから

ばらをつんでわたしたら、

無心でそれをめちやめちやに

もぎくだいてゐる。

それで、おこつたら

おどろいた目を見ひらいて、

そのこなごなの花びらを

そつとわたしの手にのせた。

その目は涙ぐんで笑ひ

その口は笑つて頬は泣いてゐる。

表情の戸まよひした

このモナリザはまるで小娘だ。

感傷風景

あなたとわたしとは向ひあつて腰をかけ、
あなたはまぶしげに西の方の山をのぞみ、
わたしはうつとりと東の方の海をうかがひ、
然しふたりはにこにこして同じ思ひを楽しむ。
とありし日のとある家の明いバルコン。
何も知らない家の主人にはよき風景をほめ、

ふたりはちらちらとお互の目のなかを楽しむ。
戀人の目よ それは何といふ美しい宇宙だらう。
全くあなたのその目ほどの眺めも花もどこにあらう……
おお、思ひ出すまい。ふたりは庭のコスモスより弱く、
幸福は卓上につと消えた鳥かげよりも淡くはかなく、
歎きは永く心に建てられた。あの新築の山荘のやうに。

うぐひす

君を見ぬ日のうぐひす。

海近き宿のうぐひす。

波の音にまぢりなくよ。うぐひす。

ひねもす聞くよ。うぐひす。

うぐひす。うぐひす。うぐひす。

寒蟬鈔

こころにちかく

目にとほく

おもかけいまは

枯柳となりぬ

おほつかなし

君によりてありし

わが寒蟬のうた

秋刀魚の歌

あはれ

今年の秋かぜよ

情あらば傳へてよ

——男ありて

今日の夕餉に ひとり

さんまを食ひて

思ひにふける と。

さんま、さんま、

そが上に青さ蜜柑の酸をしたたらせて

さんまを食ふはその男がふる里のならひなり。

そのならひをあやしみなつかしみて 女は

いくたびか青き蜜柑をもぎ来て夕餉にむかひけむ。

あはれ、人に捨てられんとする人妻と

妻にそむかれたる男と食卓にむかへば、

愛うすき父を持ちし女の兒は

小さき箸をあやつりなやみつ

父ならぬ男にさんまの腸はらをくれむと言ふにはあらずや。

あはれ

秋かぜよ

汝なれこそは見つらめ

世のつねならぬかの團まどろ樂を。

いかに

秋かぜよ

いとせめて

證あかしせよ かの一ひとときの團まどろ樂ゆめに非ずと。

あはれ

今年の秋かぜよ

情あらば傳へてよ、

夫うとに去られざりし妻と

父を失はざりし幼こなご兒とに

傳へてよ

——男ありて

今日の夕餉に ひとり

さんまを食ひて

涙をながす と。

さんま、さんま、

さんま苦いか鹽つはいか。

そが上に熱き涙をしたたらせて

さんまを食ふはいづこの里のならひぞや。

あはれ

げにそは問はまほしくをかし。

秋衣篇

その一

去年立秋ののち旬餘の或る日、机に凭りて「情史」を繙き偶々卷二十四を開きしになかに洞庭劉氏といふ一項あり、

「洞庭劉氏 其夫葉正甫 久客都門 因寄衣而侑以詩曰、情同牛女隔

天河 又喜秋來得一過 歲歲寄郎身上服 絲絲是妾手中梭 剪聲自

覺如腸斷 線脚那能抵淚多 長短只依先去樣 不知肥瘦近如何。」

これに比ぶれば謝惠連が擗衣の篇のごときは徒らに美辭を弄ぶものと
いふべし。われは三誦して秋夜の寡居に感はことのほか深かり。

織姫オリヒメと身をなして

おもふ人いとも遠し、

歎きつつ織るものは

なつかしき人に着られよ。

幾とせぞ 天の川

逢ふことぞ待たるよ、

秋ごとに君に行き

君にそふ衣ころもねたまし。

絹裂けば音ねにぞ聞く

わが胸の千々の切なさ、

縫ひゆけばなみだ落ち

縫ひきしむ針ぞ憂うれたてき。

衿きん丈は昨きののままども

わが心昨きののままども、

憂うれれたくも瘦せ給へりや

憂うれれたくも肥え給へりや。

もとより即興の戯れにして原詩の哀切に對して恥づ。

その二

洞庭劉氏の詩を三誦してよりのちまた月餘、或るゆふべ身に秋冷をおぼえて自ら秋衣をさぐるに事によりてわが思ひ凄然たるものあり。その夜筆を

とりて「秋衣の歌」をつづれども意はありて詩は遂に成らず。これを篋底に
投じ去りぬ。今年また秋衣の候となる。われは假そめながら病に伏して他
家に身を寄せたり。秋宵ただ一人の爲めに長く孤愁は時に甚だ堪ふべから
ず。つれづれのあまり舊稿を思ひ出でて再び見んことを願へども協はず。
蓋し轉轉たるわが流寓のうちに失はれたるなり。乃ちここにこれをたづ
ねつつ漫吟し得て些か意を遣りぬ。詞の稚拙は既に恥ぢざるなり。

灯かげとごかぬ小暗さに
さすらひ人の行李より

ひとり索ればわびしさよ
秋風に著る秋ごろも、

劉氏を妻に持たぬ身の
わがとり出づる古ごろも
ころもをとればそぞろにも
おもかげぞ立つ 憂き人は
わりなきことを言ひいでて

恨むよしなき佳き人よ

汝がいとし子の秋ごろも

裁つ手をしばしやめよかし、

絹を二つに裂かんととき

こほろぎの音をしばし聴け

そのかそけさを胸に知れ

つれなき人とならじかし。

人目を怖ぢて 汝はそも

あわただしくも運ぶ手に

そのほころびをつくろひし

ころもは曾て無かりしか、

今日をかぎりの別れの日

吐息とともに汝が置きて

くつがへりたる味噌汁に

しとぎなる膝なかりしか。

劉氏は人の妻なれば

ひとりとり出しわがころも

濯ぐべき人もとめねば

絲目もふるし古ごろも、

秋の灯かげにすはるとき

新しく着る古ごろも

膝なる汚點はわりなくも

いみじき汝を怨めとぞ。

しぐれに寄する抒情

しぐれ

しぐれ

もし

あの里を

とほるなら

つけておくれ

あのひとに

わたしは

今夜もねむらないでゐた――

と

あのひとに

つけておくれ

しぐれ

或る人に

あなたの夢は昨夜で二度しか見ないのに

あなたの亭主の夢はもう六べんも見た

あなたとは夢でもゆつくり話が出来ないのに

あの男とは夢で散歩して常談口を利き合ふ

夢の世界までも私には意地が悪い だから

私には來世も疑はれてならないのだ

あなたの夢はひと目で直ぐさめて

二度とも私はながいこと眠れなかつた

あなたの亭主の夢はながく見つづけて

その次の日には頭痛がする……

白状するが私は 一度あなたの亭主を

殺してしまつたあとの夢を見てみたい

私がどれだけ後悔してゐるだらうかどうかを

うつろごころ

(アアネスト ダウスン)

われは悲しめりとはあらず、泣くことは協はず
わが思ひ出のすべては、はた、眠につきつつ。

見守りつ、ゆく水の白く異しくなりまさるさま

日ねもす夕暮まで我は見守りつ、川面の變りゆくさま。

日ねもす夕ぐれまでわれは見守りつ、雨の
窓がらすのうへ打ちたたくそのうれたさ。

われは悲しめりとはあらず、ただわれは
かつてわが願ひなりしもの皆に倦んじ果てぬ。

かのひとの唇や、かのひとの眼や、ひねもす
わが身には影の影なるものとしもなりつ。

君がこころに焦がるるわが渴きは、ひねもす
忘れられしものとしもなりつ、夕の來るまでは。

かくてわれは悲みのさなかに遺されつ、泣かんとす
夕は目覺めいづるわが思ひ出はかずかず。

秋の女よ

泣き濡れて 秋の女よ
わが幻のなかに來る、
泣き濡れた秋の女を
時雨だとわたしは思ふ、

泣き濡れて 秋の女よ

汝は古城の道に去る、
頸に柳葉がちりかかる
枯れた蓮を見もしない、

泣き濡れて 秋の女よ
汝があゆみは一步一步、
愛する者から遠ざかる
泣き濡れて泣き濡れて、

泣き濡れて 秋の女よ
わが幻のなかに去る、
泣き濡れた秋の女を
時雨だとわたしは思ふ、
一しきりわたしを泣かせ
またなぐさめて 秋の女よ、
凄まじく枯れた古城の道を
わが心だとわたしは思ふ。

消閑雜詩

消閑雜詩
卷之二
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

遠き花火

つつましき人妻とふたりゐて

屋根ごしの花火を見る――

見出でしひまに消えゆきし

いともとほき花火を語る。

晝の月

野路の果、遠樹の上

空澄みて晝の月かかる。

あざやかに且つは仄か

消ぬがに、しかも殿か。

見かへればわが心の青空

おお、初戀の記憶かかる。

浴泉消息

1 大ぶん熱が出ました

隣室の客は男ふたりだ。

酒をのんで、いつまでも

何だかくだらない議論をしやがった。

やつと寝たと思つたら

ひとりは直ぐと怖ろしいいびきだ

ひとりは又すばらしい歯ぎしりだ

これではまるでさつきの議論のつづきぢやないか。

そのいびきをかうして聞いてゐると

自然、豚のことが思ひ出されるし

歯ぎしりの方はまるで柱時計のぜんまいを巻いてゐるやうだ。

おれは豚小屋の番人になつて

番小屋の柱時計に油の足りないねぢをかけてゐるのか知ら……

ゆうべの寝汗のしみ込んだこの掛ぶとん

何だかほし草のにほひがして来た……

2 だんだんよくなります

浴泉は毎日、わたしのおできの

岩苔のやうにこびりついた奴を洗ひ落すが、

谷川の水は毎晩、私の心に流れこんで

それが心の古疵に何としみるかよ。

ひとりぼつちの部屋に月がさすから

電燈を消したら

おれの目から温泉が出たつけ。

3 よほど快方に向ひました

秋になつたら

小さな家を持たう、

小榻一椽書百卷

さうして

煙草とお茶とのいいのが飲みたい、

そこには花畑がある、

妻はもういない、

童子を置いて住まう、

童女でも悪くはない、

さうだ、それよりさきに

一度、上海へ行つて

支那の童女を買つて来よう、

おもちやのやうに着飾つた

十四ぐらゐのがいい、

木芙蓉の苔のやうな奴はいくらぐらゐするだらう？

支那の詩より

花さく日さへわがひとり

花ちる日さへわがひとり

ふたりの人やいかにして

いかなる花を見るやらむ

オルゴオルにそへて弟に與ふ

恥多き物語書き得て得たる金いくらか。

病癒えそむる汝が枕べに置かばやと

オルゴオルを買ひ來て、春の夜ふけに

まづみづから試みなぐさむなり……

これはこれ詩人が心の臓なれば、

うた湧き出づる箱のよろしさよ、

聞きつつをれば春の夜はそごらに

こころはをさな子のごとく物好きになり

ふと、その箱のおもてに手をふるれば

思ひきや、これはこれ夢かとふるき思ひ出の

少女子がときめく心の臓をひそめをさめて

わが手にひびくをのきのかそけさよ

あやしさよ、いみじさよ、いとしさよ、

げに歌湧きいづるこの箱のよろしさよ。

な言ひそ、弟よ、汝がいのちいま衰へて

人の世の喜びに置く枕べの小さな箱一つと。

知れよ、汝が兄は命壯なる日にもなほ且つ、

人の世の喜びはただ小さなわが心の箱一つぞと。

孤寂

わがねがふところを月輪も知らぬ。

故園晩秋の歌

ふる里のふりたる家のあはれなる秋のまがきは人ありて
むかし植ゑにししらぎくのさかりすぎたりあれまざる桑
のはたけは人ゆかぬ畦のかたみち釣鐘の花かれにけり
古井戸の石だたみには人しらぬ鶏頭の花うつぶせにたふ
れさくなりひとりただ園をめぐりてとほくゆく雲をね
ぎらひうつつなる秋の胡蝶をあはれみてわがたたづめば

山ちかみくる日はやし

反歌

ふるさとのふりたる家の庭にして晝なく蟲をきけばかそ
けし

漳州橋畔愁夜曲

月いでて

水に映れば

蓬船とよぶねに

誰家たがやの子ぞ

笛を吹く

ひよろ　ひよろ。

遊子ひとり

橋にイミ

涼かぜに

帽を脱ぎ

うす雲や

思ひ　はろばろ。

暮春のすみれ

春あまりにもふかく もう

白つちやけた花すみれ……

みんな古くなつて かすかな

思ひ出のいろのすみれ……

むらさきの情のこまやかなものは

もう野邊にはなかつたか……

これはまた 忘れがたないことを

壺におさめて花は實つた……

うつろなる五月

世に美しき妹姉ありき。わがよき友となりしが、程なく故ありてまた相見るべくもなしと告げ来りしかば。

君を見ずして 何の五月
きらめける空いたづらに

いぶせき窓をひらくとも
ひるがへるかの水色の裳見えす。

君なくして 何の薔薇
みどりの木かげいたづらに
求めたづねて行き行くとも
涼かぜのかの笑ひをきかず。

うつろなる心に ひねもす

おん身たちの影を描き、思へ
わが香りなき安煙草やすたばこの
むなしく空に消ゆるさまを。

心を人に與へ得て

心を人に與へ得て

この日 われひとり

花なき庭をゆき

月なき窓を開く。

堀口大學に與ふ

憫むべし

汝が友は

老いぬ。

雨はれし

五月の朝に、

新しき戀を

おもはず、

古りにし友を

しのぶまで。

鳩

白い羽根が一枚散り込んだ

それから一聲啼いて聞かせた

私の窓の上に鳩が一羽ゐた

怪訝な鳩よ いったいどうしたといふのだ

旅に出てたよりのない女からの

その便りならば、……困つた事だ。

せつかくの親切なお前のその話も

女の心と同じく私にはわからない

お前の落した羽根には何も書いてない。

鳩よ 曇り日のひとりの鳩よ

見知らない鳩よ 白い鳩よ

女に返事をせよ——私はもの憂いと。

詩論

消えやすいよろこびを 何で

うたつてゐるひまがあらうか、

アイスクリームを誰が噛むか。

悲は堅いから、あまり堅いから

(嚙んだり噛んだり消化したり)

人はひとつのかなしみから

いくつもの歌を考へ出すのです。

青樓の團扇に題す

團扇よ、お前を嫉む。

秋扇の明日はものはか。

お前は夜な夜な

君が胸に置かれる。

風鈴の音に

君が眠りに落つる時。

團扇よ、言へ

君が乳房はいかに柔いか。

その胸の底に

いかに私があるか。

君が夜な夜なの夢は何か。

蘇臺竹枝より

楊柳青青楊柳黃

青黃變色過年光

妾似柳絲易憔悴

郎如柳絮太顛狂

みごりに萌えし川やなぎ

春はむかしの夢なれば

目をふるままにうつろひて

秋は黄ばみぬ川やなぎ、

われをよしなき葉となさば

君や絮わたなす花ならめ

みだれはげしき君がため

やつるるぞかし我がいのち。

海の若者

若者は海で生れた。

風を孕んだ帆の乳房で育つた。

すばらしく巨くなつた。

或る日 海へ出て

彼は もう 歸らない。

もしかするとあのごつしりした足ごり

海へ大股に歩み込んだのだ。

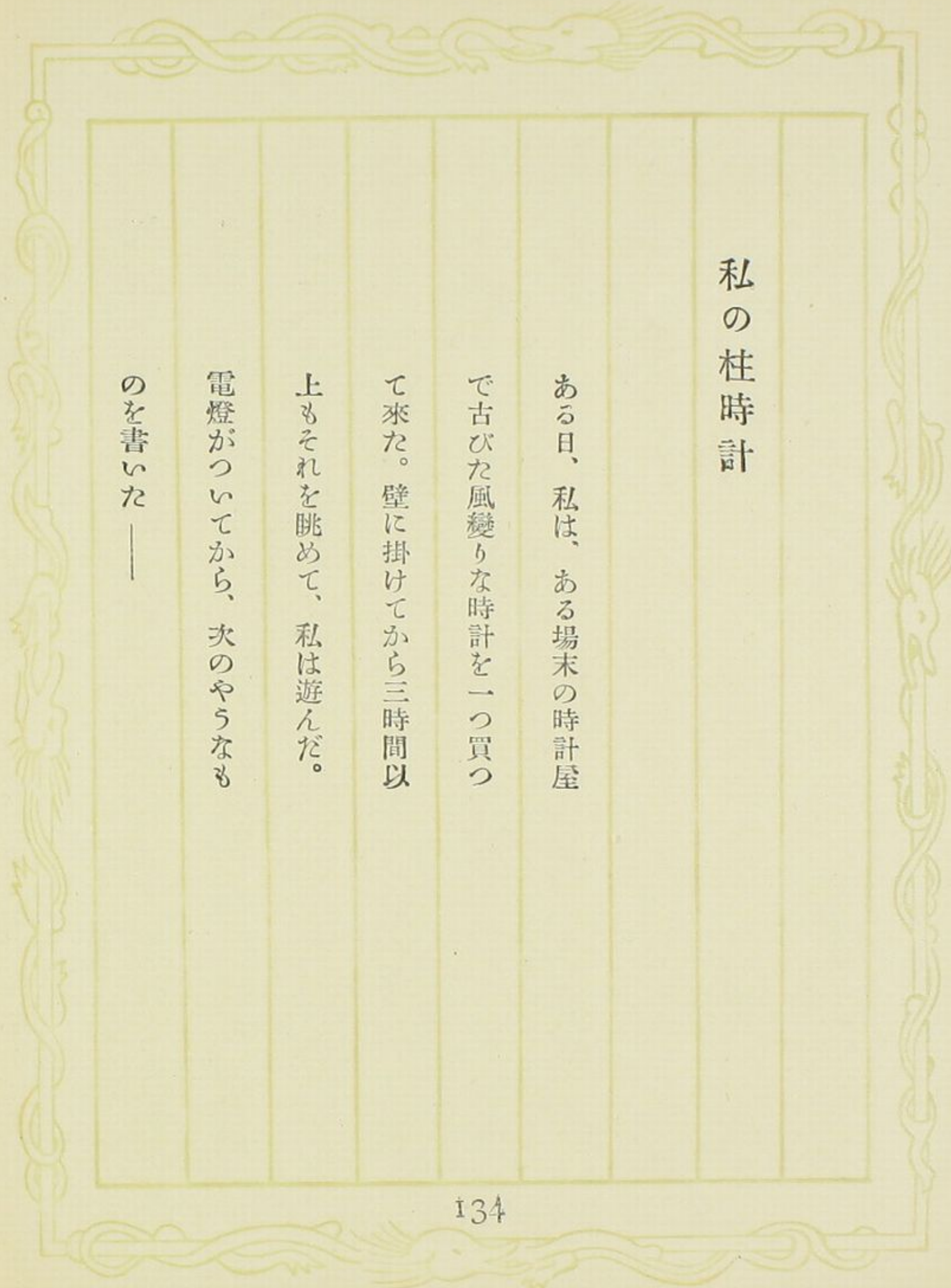
とり残された者どもは

泣いて小さな墓をたてた。



私の柱時計

ある日、私は、ある場末の時計屋
で古びた風變りな時計を一つ買つ
て來た。壁に掛けてから三時間以
上もそれを眺めて、私は遊んだ。
電燈がついてから、次のやうなも
のを書いた――



文字は喜のやうに鮮かな金

文字板は死のやうにまつ黒

ぐるりは花と葡萄葉との飾

振子と言へばたつた一房の

風に揺れるあまい葡萄の實

このよい柱時計の細工人は

無名でこそあつたがきつと

エヒキュラス程の賢者だつた

美しい教はつつましいから

人に知られずに三十年の間

場末の店で塵まみれだつた

チクタクチクタクチクタク

十三時

客よ おごろくな

十三時だ。時には

二十三時も打つ。

だが針を見る 十一時だ。

このキテレッな時計こそ

部屋あるじの主とおんなじだ。

かんぢいようは出鱈目の

メチャクチャだが

理性の針は正しいよ。

喜劇

女は夫を得て跳梁する

男は妻を得て萎靡する

跳梁するから彼女は彼を愛し

萎靡するから彼は彼女を憎んだ。

すべての哲人の妻はクサンテッペであり

すべての鐵瓶のつるは鐵である。

喜劇ほご人を憂鬱にするものはない

ドン キホオテを見ると泣けると

アナトオル フランスは言つたのだが。

冬の日の幻想

霜ぐもる十二月の空は

干ひものやくにほひにむせび

豆腐とうふやのちやるめら 聞けば

火を吹いておこすこの男の目に ふと

ごごこかの 見たこともない田舎町の場末の

古道具屋の四十女房がその孕みすがたで

釣つりラムフをとすのだ。

かかるゆふべの積み累かさねねに

聖ひたりならぬわが厭おん離りのこころはきざした。

なぞく

やきもちやきの女とかけて何と解く。

闇に怯えてたける小犬と解く。

そのころは？

うるさい。ばかぐしい。腹が立つ。

ねむれない。それでゐて不憫なのです。

中し開き

夢を見たら囁言と言ひませう、

退屈したら欠伸をませう、

腹が立つたら嘔鳴りませう、

しかしだ、萩原朔太郎君、

古心を得たら古語を語りませう。

さうではないか、萩原朔太郎君。

願ひ

大ざつはで無意味で

その場かぎり

しかし本當の

飛びきりに本當の唄をひとつ

いつか書きたい。

神さまが雲をおつくりなされた氣持が

今わかる。

おつかさんが

あの時 うたつてきかせたあの

子守唄を

そつくりそのまま思ひ出した。

その唄は きけば

おつかさんもう知らない

どうもでたらめにうたつたらしい。

ごうかして生涯にうたひたい

空気のやうな唄を一つ

自由で目立たずに

人のあるかぎりあり

いきなり肺腑にながれ込んで

無駄だけはすぐ吐き出せる

さういふ唄をごうかして一つ……

伊都満譚詩

糸満いとまんは琉球南方の一海村なり。その民は勇敢にして甚だ海洋を愛好

んで扁舟をもて遠洋に泛ぶと也。われ故郷に歸りて南海の濱に居し、

一夕、怒濤を聴きて興趣を覺ゆ。ふとリヒヤルト・デエメルに「海の

鐘」の歌ありしを思ひ出で筆とりて試みにこの譚詩をつくる。

なんぢ童たち

朝夕の目ざめに

潮騒の音を

海とや思ふらん。

わたつ海の底に

深く鳴りいづる

世にもいみじかる

鐘のひびきは、

漕ぎ出でて水の

心臓に觸るる時

選ばれし舟子ぞ

命を賭けて聞く。

波ぞ美しき。波ぞ

勇ましき。波ぞ

怖ろしき。怖ろしき

美しき、可愛しき。

怖ろしき時いと

可愛しや、波。命。

我は勇魚となりぬ

波のまにまに。

友や、七人

この目波に吞まれつ、

勇魚なる我が眞上に

星一つ見えきて、

雲裂けて、月はだら

聞け、鳴り出でぬ、鐘

海の鐘、生きて我

美しき身ぶるひす。

言ひよりにて囁く

海の胸の鐘ども。

まごころを明しぬ

底なき底より。

七人の友に

われは勝ちつつ

海はこの日より

われに身を任せつ。

「海の夫、颯風の

友、人の勇魚」

かく呼ばれてわが

髪は白くなりつ。

常若の海は

白き髪を好まず、

わが骸は今ぞ

陸の妻にまかす。

我ぞ聞きし。むかし。

海の底そこひふかく

鳴り出でて響く

いみじかるかの鐘の響。

よしや高鳴りて

胸をとごろかすとも、

知れ、潮騒しほざるはただ

たはれ女のたはれ唄。

子ら、友に勝て

風に勝て、海を娶めとれ、

深なさけいみじさ

海をその鐘に聞け。

覆りたる剣舟くさりふねは

汝なれが腕うでに抱いだけ。

二つなき海の鐘は

命かけて聞け。

わが教こそは、好き

童たちにのこす、

骸は、徒らに

陸の妻にまかす。

冬夜微吟

人しづまりて

風なごみぬ

燈と

こころと

古となりぬ。

告げよ

何者ぞ、

古より來り

われを今過り

後のちに行く

あはれ

たぎる湯のごとく

楽しいかな

わが冬の夜よ。

— つがれたる炭すすの

灰あひだとなりゆく間ま。

キイツの艶書の

競賣に附せらるるとき

(オスカア・ワイルド)

これはこれ悉くエンディミオンが

別れ居て心ひそかに愛したるものにかきし文。

いま糶市の喧騒は

あさましく垢づきし各々の紙幣をもてとりひきます。

げにや詩人が熱情の一つ一つの脈動に

あきうごの評價を呼ばふ。かの輩は藝術を愛せず

かの輩は詩人の心の寶玉を打碎き

これによりて小さく且つ病める眼を得意げにかがやかすなり。

聞かずや、そのむかし

遠き東方のとある町に、兵士等ありて

炬火を翳して眞夜中を走せ

哀れなる人の衣を得んとして罵りさわぎ

さてはその衣を賭物として鬮をひき
神が驚きをもはたそが歎きをも思はざりし事を。

譯註

斯くしてイエスを十字架に釘しのち鬮を拵りて其衣を分つ (馬太傳)

イエスを十字架につけしのち、誰が何を取んと鬮を拵りてその衣服を

分てり (馬可傳)

彼等鬮をしてイエスの衣服を分つ (路加傳)

兵卒どもイエスを十字架に釘し、後その上衣をとり四つに分て各その

一を取りまた裏衣を取り、此裏衣は縫なく上より渾く織れるものなり
ければ、互に言ひけるは、之を裂かすして誰の屬にならんか鬮にすべし、
此は聖書に彼等たがひに我衣を分わが裏衣を鬮にすと云ふに應せん爲
めなり。兵卒ども已に此事を行り (約翰傳)

ひそかに己が詩集に題す

悔恨のみが罪惡をつくる

思ひ出は忘却の糟であり

こじれた感情だけ歌になる。

昨日の花束に嗅ぎ入つて

氣の毒な讀者は三嘆する。

佐藤春夫詩集畢

佐藤春夫詩集目録

幼き歌

夕づつを見て	一三
大吠岬旅情のうた	一四
少年の日	一六
秋の夜	二〇
ためいき	二二
小唄	二二
嫁ぎゆく人に	三三

同心草

寒蟬鈔

水邊月夜の歌	三八
或とき人に興へて	四〇
また或とき人に興へて	四二
海への戀	四四
淡月梨花の歌	四六
秋くさ	四九
筈うた	五〇
後の日に	五二
よきひとよ	五四
こころ通はざる日に	五六
なみだ	五八
別離	六〇
感傷竹像	六二
感傷風景	六四
うぐいす	六六

心在人に興へ得て 堀口大學に興ふ	一 二 一
鳩 詩論	一 二 六 四
青樓の團扇に題す 蘇臺竹枝より	一 三 〇 八
海の若者 私の柱時計	一 三 三 二
十三時 喜劇	一 三 八 〇
冬の日の幻想 なぞ	一 四 四 二
申し開き 願ひ	一 四 四 五
伊都滿譚詩 冬夜微吟	一 五 四 九
キイツの艶書の競覽 ひそかに己が詩集に題す	一 六 六 二

秋刀魚の歌 秋衣篇	七 七 〇
しぐれに寄する抒情 或る人に	八 八 六
うつろころ 秋の女よ	九 九 〇
消閑雑詩	
遠き花火 雪の月	〇 九 九
浴泉消息 支那の詩より	〇 〇 七
オルゴアルにそへて弟に興ふ 孤寂	一 〇 八
故園晩秋の歌 漳州橋畔愁夜曲	一 一 四
暮春のすみれ うつろなる五月	一 一 八

FOTY

大正十五年三月十五日印刷
大正十五年三月十八日發行

第一册 千八百部
外七種各册十三部

佐藤春夫詩集

定價二圓五十錢

著者 佐藤春夫

發行者 長谷川巳之吉

組版所 田中理想社
印刷所 溝口印刷所

發行所 第一書房
東京芝區高輪南町六番地



第一書房刊行詩書目錄

上田敏遺著 上田敏詩集 定價三圓八十錢

堀口大學著 砂の枕 定價二圓

堀口大學譯 月下の一群 初刷絶版再刷普及版

堀口大學譯 動物詩集 定價二圓

佐藤春夫著 佐藤春夫詩集 定價二圓五十錢

日夏耿之介著 定本詩集三册 非賣品(讓價三十圓)

野口米次郎著 表象抒情詩 定價一圓八十錢

三富朽葉遺著 三富朽葉詩集 近刊

